公立・私立最難関校進学を
目指す新中3生へ
【栄冠へのパスポート】
ホーム・スクール 特訓クラス
入室テスト　毎週土曜日 午後4時

塾だより

— 魅力ある塾づくりを目指した塾情報誌 —

発行所●ホーム・スクール
茨城県取手市東6-37-7 只石ビル
フリーダイヤル 0120-958-375
http://www.homeschool.co.jp
編　集●Be-type DESIGN
茨城県取手市井野566-61
配布地域●茨城県南部及び千葉県我孫子市地区

子どもたちに――21世紀に発揮できる知の力を!!

『第一志望校合格』のために

今、学校の姿、学ぶ内容、受験校の選び方、合格に必要な学力、入試制度等、子ども達をとりまく教育環境が大きく変わりつつあります。確かなことは、変化の中にあっても中学受験か高校受験か、誰もがどちらかに必ず挑まなければならないという事。

行きたい（行かせたい）学校の入学試験を突破できるよう、我が子にどのような教育を与えなければならないか、正しい判断が今ほど問われている時代はありません。

深刻化した学力低下

ゆとり教育以降、発表される子ども達の学力調査は、どれをとっても学力低下が進行していることを物語っていました。

二〇〇四年のOECD加盟国による十五歳の調査発表では、日本は数学で一位から六位に、読解力は八位から十四位に下がってしまいました。

同じ頃文部科学省から小・中学生対象の全国一斉学力テストの結果が公表されています。それによると、学習内容が三割減り、出題範囲が狭くなっているにもかかわらず、二年前のテストと同一問題で約十七%も正答率が下回ってしまいました。特に数学的にものを考える問題や、文章の内容を読み取ったり考えを表現する問題が苦手であるなど、国際学力調査と同じ傾向が顕著になりました。

土浦第一高等学校

「脱ゆとり」で学力重視へ

二〇〇五年一月「子どもの学力低下を深刻に受け止め、ゆとり教育を全面的に見直す」ことが首相の施政方針に盛り込まれました。総合学習を削減して主要教科の授業時間を増やすこと、また土曜日授業の復活も検討課題に入りました。そして八月には学力低下への対応策として「全国学力テスト」を小六・中三の全員を対象に二〇〇七年度から毎年実施することになりました。そして二〇〇八年に改訂された学習指導要領により、「脱ゆとり」が決定されました。一部前倒ししながら小学校は二〇一一年、中学校は十二年、高校は十三年から完全に移行しました。これにより、授業時間は小学校では二七八時間、中学校では一〇五時間ゆとり教育時代より増えました。

内容も、小学校で四七都道府県の名称と位置や台形の面積の公式、中学校でイオンなどが復活しました。また教科書は、特に小学生用はゆとり全盛期（二〇〇一年検定）より全教科で四三%も増えました。さらに東京都や大阪市などで、公立小中学校での土曜授業の復活容認など、学校教育は学力重視の傾向を強めています。

私学の攻勢 改革の公立

私学は十三年前に早稲田が小学校を併設するなど、逸早く少子化対策を進めました。茨城に於いても土浦日大による県内初の中等教育学校の設立、取手聖徳女子が全国初の女子教育特例校の指定、昨年は江戸取小学校、今年は東洋大牛久中が開校しています。さらに来年は埼玉の開智学園による守谷市内への小学校の開校が予定されています。

一方、公立は進学高校の中・高一貫校作りを徐々に進めてきました。都立は多くの著名人を輩出した名門小石川や白鷗、千葉県は県立トップ校の千葉など、現在は首都圏に二十一校まで増えました。昨春一期生が卒業した並木が東大4名出すなど公立の中高一貫校の大学進学実績は堅調です。さらに二〇一六年には東葛高校が付属中学の設置を予定しています。

また、つくば市は二〇一二年から市内全小・中学校五十三校十五学園において、小・中一貫教育を開始しました。これにより中学校の教員による小学生への授業が可能になり、小学5年生から専門性を生かした教科担任制になりました。そして「つくばスタイル科」の導入とともに、英語授業を小学一年生から開始しています。私学も、公立も、様々な改革を通して、大学進学指導の強化を進めています。

変わりつつある中学入試

中学入試の最大の特徴は、各中学の入試問題の独自性にあり、情報の収集と問題の分析、予想、そして余裕をもって合格できる学力を身に付けさせることが塾の役割です。入試問題は「ゆとり」時代に易しくなる傾向でしたが、近年御三家で出題されるような難問が、多くの私立でもまた出されるようになりました。受験生の特徴としては、かつては受験学年になったら全ての習い事をやめるのが当たり前でしたが、習い事や英語（英会話）を続けながらの受験生が増える傾向にあります。もちろん入学後のことや将来を考えてのことですが、英語を選択ながら試験科目の一つに採用する中学が年々増加しています。また、二〇〇八年のリーマンショック以降続いている私立受験者数の減少は、早慶クラスの付属中学や難関校にまで及んでいます。そのため、ほとんどの中学で一般入試が複数回用意され、午後入試を実施する学校も増えました。

東葛飾高等学校

得点重視になった高校入試

高校入試は、中学での成績が相対評価から絶対評価に変わったことを受け、入試の得点を重視するようになりました。茨城の公立入試から二〇一三年、学力試験抜きの推薦入試が消えました。代わりに「特色選抜」になり、全員、入試で得点することが合格に欠かせなくなりました。一般入試は二段階選抜になっています。

まず得点と内申点の両方共良かった受験生をA群として合格にします（定員の6～7割）。残り（定員の3～4割）はその他B群から選ばれますが、ほとんどの進学校が残り定員の8割を得点の良い順に合格にしています。実際にはいませんが理論的には通信簿がオール1でも入試の得点さえ良ければ土浦一高に合格できる仕組みになっています。

千葉県の公立高入試は、既に推薦は無く、一般入試を前期と後期の二回実施に切り換っています。よって茨城・千葉の両県とも内申書は大事ではありますが、学校で行う目先のテストのための勉強だけでは、結局最後の入試には勝てなくなっています。高校入試は、私立はもちろん公立も最後の決め手は学力なのです。

改革進む大学入試

大学進学率が五〇%に達し早くから入学者の学力低下に悩んでいた大学。国立大学協会は、センター試験の科目を増やしたり、各大学が秀でた才能を持つ入学者を一人でも多くとろうとAO・推薦入試（指定校・公募）を拡大させる中、いよいよ東大も来年推薦入試を導入する予定です。推薦入学者の数は既に大学入学者全体の半数を超えています。推薦は高校三年間を通じての評定を必要とするなど、崩壊しかけていた入学試験の「学力維持機能」を取り戻しつつあるかに見えました。

しかし、二〇〇九年定員と受験者数が同じになる大学全入時代がやってきました。選ばなければどこかの大学へは入れることになりますが、実際は二極化が進行し不人気大学を中心に推薦基準の形骸化が広がりました。また長引く不況の中で、大学による就活支援の度合いが人気を左右するという事態が進行してしまいました。政府の教育再生実行会議は二〇一三年十月、第四次提言を発表しました。骨子は、『五年後をめどにセンター試験を廃止し、達成度テスト（基礎・発展）を高校在学中に複数回受けられるようにする』というものです。基礎レベルは推薦・AOの判定での活用を、発展レベルは一般入試での活用を検討しています。これにより、推薦・OAも評定だけではなく全高校で一斉に実施する複数回の共通テストで高得点をとることが必要になります。これからの受験生は、早目に目標を決めて受験勉強に取り組むことが益々必要となります。

国際化社会における英語教育のゆくえ

国民的克服課題になって久しい日本人の英語力の貧しさ。これまで小学五年生からの授業への導入・外国語指導助手（ALT）の活用、リスニングの公立高入試での配点の引き上げやセンター試験への導入、高校・大学入試への英検の優遇措置が進められてきました。今後はさらに、小学英語の開始時期を三年生に前倒しにすること、五年生から英語を正式教科として週三時間読み書きも学ぶこと、中学英語の達成レベルを「三級程度」から「準二級程度」に、高校は「二級か準一級程度」に引き上げることが決まっています。

また文科省は現在、英語資格試験をセンター試験へ活用する特例措置を前倒し、英検準一級かTOEIC780点以上でセンター試験の英語科目を満点と換算する方向です。小・中・高・大を通じて、英語教育が強化されています。今まで以上に英語力と英検の資格が入試に必要となりつつあるのです。

江戸川学園取手中・高等学校

子ども達に与えるべき教育とは

「脱ゆとり」が進む中、子ども達をとりまく教育環境は、習得すべき学習内容が増えながら、入学試験は中学・高校・大学も多様化しながら「学力重視の競争」の傾向を強めています。

だからこそ子ども達にしっかりと与え、育まなければならない力が三つあるのです。

一つは多様化し激化する入学試験で、確実に合格できる学力。一つは高等教育にも耐え、自分の頭脳で考え解決し得る思考力。一つは検定等を活用した、よりクオリティの高い知力。

我が子がこれからの日本、新しい社会で力強く生きてゆく為に、親としての認識が今ほど問われている時代はありません。

- ホーム・スクールは、1人ひとりの目標＝第一志望に合格できる学力を身に付けさせます。
- ホーム・スクールは、どの教科も思考力の育成を重視し、「なぜ？」を大切にした授業をします。
- ホーム・スクールは、英検・漢検・数検の資格挑戦を奨励し、塾生全員の取得を目指します。
- ホーム・スクールは、常に新しい時代に対応すべく情報を収集・分析し日々の授業を行っていきます。